

東日本大震災から10年を迎えて

ひかり新聞

共生共助の社会をめざす

2021.1.31
No.41
一般社団法人
ひかりプロジェクト

2021年の新しい年を迎え
心よりお慶び申し上げます



気仙沼湾、五十鈴神社浮見堂の恵比寿像から横断橋を望む

(撮影・奥原幹雄)

H P A理事 奥原 幹雄
(宮城県気仙沼市)

昨年は新型コロナウイルスの感染拡大により、世界中で多くの尊い命が奪われ、社会全体に混乱と先行きの見えない不安が日常生活に影を落とししました。これまでの生活様式を大きく変えていかなければならないという、私たちにとっては初めての経験となりました。「いつまで自粛すればいいの?」といった不安感や、「どこで感染するか分からないから警戒しなければ!」といった疑心が付きまとい、2021年を迎えてもなおコロナ禍が続くことは予想され、さらなる行動変容が求められています。

ウィズコロナのなかで「ニューノーマル」と言われる新しい日常をどう充実させていくのか。これが今年のテーマになると思われます。延期された「東京五輪2020」を人類はどのような新しいスタイルで開催するのか。それに伴い新しいサービスやシステムが登場し、人類の日常生活はどう成長していくのか、興味深くとも楽しみます。さて、今年には東日本大震災から10年を迎えます。長かった10年、あつという間の10年、感じ方はそれぞれあると思いますが、この10年という年月は誰にとっても意味深い10年間だったのでないでしょうか。私も今日までの10年間を振り返り、これほど激動の10年は経験したことがなく、平凡な人生において、こんなに多くの人との出会いや経験が待っているとは思っていませんでした。一つひとつの出来事

を数え上げれば切りがありません。一番に思い浮かぶのは、出会った人たちの表情やしぐさ、会話の断片などです。今でも鮮明に思い出されます。

東日本大震災の大地震、大津波は、あまりにも大きすぎる出来事でした。それによって失ったものはたくさんありましたが、それ以上に得たものもたくさんありました。何しろ全体像が大きすぎて、総括するにはまだ早いように感じています。

被災地は、震災の爪痕を見つづけるのが難しいほど、街並みは復旧してきましました。しかし、人々は震災を乗り越えることができたのかと言えばそうではなく、また被災の延長線を歩んでいます。大切な人を亡くし、いまだに悲しみの中で苦しめられている方もおられます。

それは東日本大震災に限らず、各地で発生した大地震や台風被害、豪雨災害などにより被災され、困難のなかで苦しめられている方々はたくさんおられると思います。各地の一日も早い復興をお祈りいたします。

「つながりを大切に」と願い、続けてきた被災者支援活動や子ども育成活動は、コロナ禍にあって一時休止させていただいており、活動再開に向けては、状況をみながら協議・検討をしていくこととなりますが、まずはここまで10年間、皆さまのご協力を頂きながら活動が続けてこられたこと、また皆さまより被災地へのご支援・ご協力・応援を頂きましたこと、心より感謝申し上げますとともに、今後も被災地の復興を見守っていただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

今、私たちができることを
— 今年の活動を展望する —

藤原真久 / 大江 靖

世界中がコロナ禍で移動制限や活動自粛が求められる中、ひかりプロジェクトは今年どのように活動していくのか、3密を避けつつ都内某所にて、藤原眞久理事長に伺いました。

大江 新年おめでとございます。

藤原 おめでとございます。

大江 昨年は新型コロナウイルスで明け暮れた年でしたね。

藤原 そうですね、人の移動が制限されたり、飲食店の営業時間が短縮要請され、息苦しく、健康や経済の面で世界中の人が大変な苦勞をした年であったと思います。

そんな中、ひかりプロジェクト（以下HPA）の活動にご支援、ご協力いただいた会員、理解者の皆さまには心よりお礼申し上げます。

昨年度を振り返って

活動が制限される中、
オンライン防災講座を

大江 厳しい1年でしたが、昨年の活動を振り返っていかがですか。

藤原 3月に予定していた熊本での支援活動を中止し、4月には緊急事態



一般社団法人ひかりプロジェクト
理事長 藤原眞久

宣言も出され、例年実施されていたドリームキャンプも実行委員会で開催が決まり、準備も中断しました。

そんな中、各企業では従業員の健康を守るために、オンライン会議や在宅勤務が広がりました。私たちがコロナだから何もできないというのではなく、皆で知恵を出し、この環境下でできる事業としてオンライン防災講座を企画しました。約2ヶ月半の間ですが、隔週で実施し、11名の方に受講していただきました。これは大きな成果だと思います。

大江 そうですね、オンライン会議は私たちがスカイプで10年以上前から行っていましたね。

藤原 しかし、講習会となると、参加する方はパソコン操作や事前配布される資料のプリントなど、ある程度のスキルが必要ですし、講師もオンラインでの講座に慣れるのに、だいぶ苦勞しました。

今回の参加者にも、70代、80代の方が何名かおられました。この方々は仕事でそういったスキルを身に付けられたのでしょうか、新しいものに対して食わず嫌いにならず、なじんでいくというのは、いつの時代でも必要ですね。

大江 講習会場への移動がなく、どこに住んでいても参加できることは、新しい取り組みの可能性を見出した

と思います。

藤原 講師陣についても、それぞれの専門分野があつて、気象、耐震建築、自治会での防災活動、消防団での活動や行政との関わり、被災地のボランティア活動など、各講師の経験知識が生かされた場になりました。

大江 とところで、昨年はHPAに新規加入していただいたのは、何名ぐらいでしたか。

藤原 昨年は、10名の方に新規加入いただき、現在、会員は106名になりました。私たちの活動にご理解、ご支援いただき、本当にありがたいことです。

大江 少しずつではありますが、HPAの活動の裾野が広がっています。これは喜ばしいですね。

原点を忘れずに

難儀に遭っている人を見たら、助けずにおられない人の本性

藤原 私たちがHPAの活動を考えていくうえで、一番大切なのは、その原点を忘れないことだと思います。

HPAは10年前の東日本大震災をきっかけに生まれましたが、多くの人が被災された人々のために

できるだけのことを見せてもらいたいと願いました。私たちも、東北の被災地に行き、全国から来た多くのボランティアの方々と一緒に頑張って、泥かきや洗浄、荷物の運び出し、そして仮設住宅ができるまで様々なイベントを手伝い、住民の方々がちょっとでも心が和むようにと活動しました。

気仙沼の子どもたちを中心に、仮設住宅の中で、あまり音も立てられない、窮屈な暮らしを強いられている子どもたちに、「せめて3日間だけでも、自然の中でのびのびと遊ばせてあげたい」との願いで始まったドリームキャンプの開催にも、地元の方々と一緒になって取り組んできました。

これは、人が皆持っている「難儀に遭っている人を見たら、助けずにはおられない」という、人を思いやる気持ち、これが基本だと思うのです。

そういう気持ちを持った方々を、東日本大震災の被災地だけでなく、熊本でも、一昨年秋の台風被害に遭った千葉の房総や栃木の佐野などでも見てきました。

その原点は、今後ともHPAの活動の基本に、忘れないようにしたいです。

大江 私も気仙沼での活動に参加し、今日に至っていますが、多くの方に出会い、その皆さんはやはり根底に人への優しさという、確かなものを持っていらっしゃる。

私たちができるといって

まずは、災害情報連絡員制度を

藤原 HPAの会員は50代から70代が多く、被災直後に現地に出向き行動することは難しいと思います。ですから私たちは、避難所ができた後ぐらいからの支援が主体となります。

大江 そうですね、HPAの財や人的規模、構成メンバーを考えると、できるところで精一杯取り組ませていただきたいと思います。

このような環境を踏まえ、今年の活動について伺いたいと思います。

藤原 先ほど言いましたように、自然災害が発生したときに直ぐには対応できませんが、現地の情報を正しく把握し、私たちの出番となったら、物資や人的支援を行っていきたいと考えています。そのために、現地の生の情報を伝えてもらう「災害情報

連絡員制度」の運用を開始します。

あまり難しく考えないでほしいのですが、大きな自然災害が起こった時に、被災地の近くの方から自分の周りで見たこと、必要とされていることを情報として伝えていただくということですね。

現地の生の情報が大事というのは、誰でも分るのですが、昨年こういう例がありました。

7月の熊本県人吉地方の水害時にタオルを送り、喜ばれました。被災後かなりの期間、宅配便も現地へは配送できなかったため、鹿児島からボランティアに向かう方と連絡を取り合い、鹿児島にタオルを送って、そこから人吉に持参していただきました。熊本での活動で知り合った方です。

大江 そういった、人と人とのつながりや、きめ細かい情報把握と対応が重要ですね。

藤原 送った先の方にも喜ばれました

し、タオルを提供してくださった方々にも、役に立ったことを報告し、こちらでも喜ばれました。お金を送ることも大切ですが、こういった取り組みは心が通い合う活動だと思います。ただ、おやみに物資を送ればよいということでもないのです。そこは注意が必要です。

ソフトの防災が重要

災害に関する「知識、情報、教訓が、生命を助けてくれる」

大江 今年のオンライン防災講座の計画についてはいかがですか。

藤原 昨年の講座が終わった後、日本の防災に関する第一人者とも呼ばれる河田恵昭先生（かわたけあきあき）の防災に関する講演をネットでも聴きました。

その中で強調しておられたのは、「ハードの防災対策はお金と時間がかかる。例えば、津波被害が予測される地域の地面を高くする、高いところに移転するなどというのは、そう簡単にできることではない」。

東北の被災地などで何メートルも盛土をしているところがあります。これは何年もかかっています。

「ハードの対策も必要だが、ソフトの防災、つまり防災に関する様々な情報を学んで、役立てることが大事だ。これまでの災害に関する知識、情報、教訓が生命を助けてくれる」と語っておられます。

これを聞いて、防災講座をやることの意義を強く感じました。



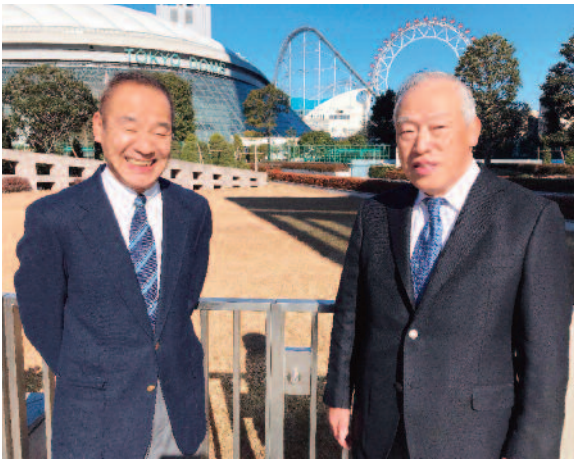
一般社団法人ひかりプロジェクト
理事・ひかり新聞編集長 大江 靖

今年は4月から始める予定で、準備も進めています。講座の構成も少し見直して、より多くの方に参加していただきたいと願っています。

今年の気仙沼、熊本での活動は 現地の判断を尊重して

大江 今年、東日本大震災から10年、熊本地震から5年の節年になります。私も両方の支援活動に参加させていただきました。マスコミでも、2月下旬ぐらいからこの件については報道されると思いますが、東北、熊本での活動について、いかがでしょうか。

藤原 私たちは、気仙沼を中心に8年間ドリームキャンプ開催のお手伝いをさせていただいてきました。昨年は、新型コロナウイルスで延期となり、非常に残念でした。今年もこの収束次第ですが、現地の皆さんの判断に従っ



対談を終えて

て行動します。

大江 第一回ドリームキャンプで6歳だった子は、当たり前ですが、今や16歳の高校生になっています。一昨年のキャンプでは、その高校生がキャンプのスタッフとして参加してくれたのはとても嬉しかったです。

藤原 ドリームキャンプという取り組みが、地域社会や子どもたちに、とてもよい影響を与えていると思います。地元商店街や自治会が主体で実行委員会を組織し、私たちがそのお手伝いをさせていただいています。奥原幹雄実行委員長に伺うと、市内でのドリームキャンプの評価は高く、募集すれば、間違いなくたくさん参加してくれると聞きました。

大江 ここ数年は近隣の小学校の先生や看護学生、消防署員の方々がスタッフとして参加していただき、地域に浸透して広がりを感じています。熊本についてはいかがですか。

藤原 熊本では、仮設住宅からの退出で住民の数がだいぶ減っているそうです。そして、仮設住宅そのものも統合でかなり数が減っています。それは時間が経てば当然のことですが、住民の方は災害公営住宅への移転、あるいは仮設住宅の統合などでまた新たなコミュニティを作らなくてはならず、苦労されています。

私たちの友好団体である「移動図書館おあしす」代表の橋本信一さんから伺ったのですが、益城町の仮設住宅で、図書館を

実施すると、わざわざ災害公営住宅から来られ、住民や橋本さんとの再会を喜んでくださる方が多いようです。

大江 気仙沼でも全く同じようなことを聞きます。高齢になってから違う場所です新たな人間関係を作るのは、かなり大変なことですね。どこかの被災地でも同じ状況なんですね。

藤原 HPAとしても、熊本にも継続的に支援させていただきたいと考えています。昨年7月の水害で球磨村にできた仮設住宅で「移動図書館おあしす」さんが活動を始められたようですので、そちらにも応援させてもらいます。

大江 ひかり新聞としても、皆さんに広く知っていただくようにしていきます。

藤原 HPAの活動で、会員の方々の参加の呼びかけや報告については、ひかり新聞やホームページ以外に、会員向けにフェイスブックなどSNSで連絡、広報していきたいと考えています。ぜひ、得意な方は手伝ってください。

大江 ありがとうございます。今年には特にコロナを克服しつつ、新たな活動へ邁進していきたいですね。

藤原 皆さま、本年もどうぞよろしく願っています。

第2回オンライン防災講座のご案内

—コロナ禍にひるまず、自然災害への備えを！—

主任講師 入田 央

昨年、新型コロナウイルス感染が拡大する中、「自分の命は自らが守る」防災意識を高めるために「第1回オンライン防災講座」を開催したところ、全国から11名の方が受講され、コロナに負けないぞ！という参加者の熱意を感じ、感動いたしました。

今再び、各地に緊急事態宣言が出されていますが、「コロナ禍にひるまず、自然災害への備えを！」という気持ちで、「災害発生のしくみを学ぶと共に、自分の命は自らが守る、共に助け合う」をテーマに、第2回オンライン防災講座を開催いたします。

一般市民が知っておくべき防災に関する知識と、自然災害が身近に起こったときに取るべき行動について学びます。皆さまのご参加をお待ちしています。

この講座は「Web会議システムZoom」で行い、全国どこからでも受講ができます。お問い合わせはHPA事務局まで。

1. 開催期間 2021年4月7日より5月19日まで（毎週水曜日）
時間＝20：00～22：00
2. 参加資格 ひかりプロジェクト会員（正会員・賛助会員）及び会員の推薦を受けた方
3. 参加費用 2,000円

木山仮設団地クリスマス会

移動図書館おあしす代表 橋本信一

「移動図書館おあしす」と「木山仮設団地スマイル子ども食堂」は、2020年12月26日、クリスマス会を行いました。

「コロナ感染症対策のため「密」にならないように注意し、さらに屋外で実施しました。

熊本地震の被災者が暮らす仮設団地は、4年前の発災当初には110か所の仮設団地がありました。集約が行われ、14か所に減少しました。

益城町の木山仮設団地は、集約対象になった他の仮設団地の住民を受け入れて、現在、約80世帯が暮らしています。



焼き芋、美味しいね



石焼き芋担当は
橋本信一さん

穏やかな日差しのもと、たこ焼き100食、カレー50食、石焼き芋30キ口を用意。仮設団地住民や、ボランティアたちが集まり、準備を行いました。この活動には、赤い羽根共同募金からの支援を受け、株式会社グリーンコップ、熊本地震で被災したさつまいも

農家から、食材の提供を受けました。また、福岡県のボランティアグループからは、手作りのサンタクロースのマスコットと、除菌シートをセットにしたクリスマスプレゼントが寄せられました。

午前11時半から「子ども食堂」を開設すると、お腹を空かせた子どもたちが次々とやってきて、「おいしい、おかわり」と言って、うつわを差し出していました。

準備の段階から参加した保護者は、「コロナ禍の中で、なかなか友だちといっしょに遊べない。こうして『子ども食堂』が開設されると、みんな嬉しそうに走り回っている。密になること

は避けたいといけないが、たまには、こうした屋外でのイベントを開催してもいいと思う」と感想を述べておられました。

「子ども食堂」は今後、感染対策を十分に行ったうえで、屋外で、月1回のペースで実施していくことにしています。

また「移動図書館おあしす」は、ひかりプロジェクトの支援を受けて、2020年7月豪雨災害の被災地・熊本県球磨村での図書館活動を開始しました。

球磨村での活動報告は、次号の『ひかり新聞』でさせていただきます。



ただいまカレーの準備中



外で食べるカレーやたこ焼きもまた格別!

「地震」発生時の対応(続き)

遭遇した場所によって、どのような行動を取ればよいか、確認しましょう。

① ビルの中

地震発生時、エレベーターに乗っていたら、すべての階のボタンを押し、停止した階で降りる。

新しい高層ビルは耐震性に優れ、倒壊の危険性は少ないが、高層階では揺れが大きく長く続きやすい。机の下などで揺れがおさまるのを待とう。

② 地下街

壁や太い柱に身を寄せて、頭をカバンなどで守る。その際、頭とカバンの間に10cm程度の隙間を空けて持つこと。隙間がクッションになり、落下物からの衝撃を和らげることができる。

揺れがおさまったら、係員の指示に従って避難する。火災が発生した時は、煙が向かってくる方向と逆の非常口に向かって避難する。

③ 地下鉄などの乗り物の中

電車が急停車することがあるので、つり革や手すりにしっかりとつかまる。駅員や乗務員の指示に従う。指示がないのに不用意に車外に出ない。

④ 劇場・映画館

客席のフロアは柱がなく広い空間になっているため、天井が落下する危険

性がある。天井からの落下物に注意し、カバンなどで頭を保護し、シートの上に身を寄せて守る。

また、大勢の人がいるので、慌てて非常口に殺到すると、将棋倒しなどの二次被害を引き起こす危険性がある。係員の指示に従い、落ち着いて行動する。

⑤ 自動車を運転中

急ブレーキはかけず、少しずつスピードを落とし、交差点を避け、左側に寄せてエンジンを止める。カーラジオで情報を聞く。避難するときは窓を閉め、エンジンキーは車内に残したままドアロックはしない。

⑥ 街の中

繁華街やビル街で遭遇したときは、落下物から身を守る。上からものが落ちてくることが多いので、カバンなどで頭を守りながら、安全な広い場所に避難する。

ブロック塀や、自販機、電柱など、地震で傾いたり倒れやすいものには近づかない。垂れ下がった電線などは、危険なのでそばに寄らない。

⑦ デパートやスーパーマーケット

商品棚からの落下物、陳列棚や大型商品の転倒に気をつける。スーパーでは買物かごで頭を守る。

⑧ 高層マンション

大地震が起こると、エレベーターが使えなくなる。高層階に住む人は当分の間、自力で生活できる水・食料を確保しておく。

編集後記

▼緊急事態宣言が1都3県に発出され、1週間後に2府5県が追加されました。年末年始を過ぎ、日本全国に感染の拡大が懸念されています。皆さまにおかれましても、さらなる感染予防、防止対応をされ、ご自愛ください。

▼あれから26年、あれから10年、あれから5年です。被災された皆さま、ボランティアの皆さま、それぞれの年月の経過があったと思います。そして、私

自身はどれほど成長できたかを自問しています。

▼年頭対談の取材に際して、記録関係を橋本敏廣監事、写真撮影は奥田昌弘理事にご協力いただきました。ありがとうございました。

▼定時総会の出欠のご連絡をよろしくお願いいたします。防災講座の時は不慣れたZoomでしたが、その経験を活かして、総会を運営していきます。何事も挑戦と経験で一歩ずつ進んでいくんですね。(大江 靖)

第5回定時総会(オンライン)のご案内

毎年2月に定時総会を開催しておりますが、今年は新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑みて、オンラインで開催させていただくことになりました。

これまで遠方のためご参加いただけなかった方も、オンラインで参加が可能ですので、ぜひともご出席いただきますようお願い申し上げます。

記

1. 開催日時 2021年2月20日(土) 13:00~14:00
2. 開催方法 「Zoom」によるオンライン会議方式
※パソコン、タブレット、スマートフォン等でご参加できます。
3. 議 題 報告事項(1) 2020年度 事業報告の件
第1号議案 2020年度 貸借対照表及び損益計算書承認の件
報告事項(2) 2021年度 事業計画書並びに収支予算書の件

★会員の皆さまは、総会のご案内に同封しました返信葉書にて、2月10日(水)までに
出欠をお知らせください。出席の方には、後日「総会議案書」をお送りします。
なお、ご不明な点は事務局までご連絡ください。



ひかり新聞

No.41 2021年(令和3年)1月31日

発行者：一般社団法人 ひかりプロジェクト

〒401-0304 山梨県南都留郡富士河口湖町河口1975

電話 0555-72-8191 FAX 0555-76-6696

https://hikari-project.jimdo.com/ E-mail : hpa@road.ocn.ne.jp